

# フランコプロヴァンス語地域における普通名詞の数の体系

—ラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞に着目して—

## Le système singulier – pluriel des noms communs en francoprovençal

–les noms communs issus de noms latins de la deuxième déclinaison–

大河原 香穂

OKAWARA Kaho

東京外国語大学大学院博士後期課程

Doctoral Program, TUFS

E-mail: okawara.kaho.r0@tufs.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.46 2020, p.97-118.

原稿受理 2020-11-30 ; 最終版 2021-02-19

抄録

本研究では、19 世紀末から 20 世紀初頭のフランコプロヴァンス語地域の方言における、ラテン語の第 2 曲用の名詞を起源とする、普通名詞の単数、複数の区別について扱う。分析対象の資料は『フランス言語地図』 *Atlas linguistique de la France* であり、そのうち分析対象の語は、genou 「膝」、œil 「目」、pou 「シラミ」、râteau 「熊手」である。その結果、これらの語について、同地域の多くの地点では、単数形と複数形が音声的に同形態であったことがわかった。

### Résumé

Notre recherche porte sur les formes du singulier et du pluriel des noms communs issus de noms latins de la deuxième déclinaison en francoprovençal de la fin du XIX<sup>ème</sup> siècle au début du XX<sup>ème</sup> siècle. On utilise les cartes de « genou », « œil », « pou » et « râteau » dans l'*Atlas linguistique de la France*. Nous avons trouvé que pour ces mots les formes du singulier et du pluriel étaient homophoniques dans le lieu géographique en question.

キーワード : 方言学、フランコプロヴァンス語、フランス語、数

© ふらんぼー Flambeau 46 (2020) pp.97–118.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



## 0. はじめに

本稿では、フランコプロヴァンス語地域における数の体系について扱う。ロマンス諸語に分類される言語では、普通名詞であれば、多くの場合で単数、複数の区別を行う。現代の標準フランス語は、このロマンス諸語に分類され、例に漏れず普通名詞の単数、複数の区別を行う。但し、一部の例外を除き、現代の標準フランス語の大多数の普通名詞では、書記上で単数形と複数形が異なっているにとどまり、音声上は単数形、複数形が同じ形態であることが知られている。

しかしながら、現在フランス語が話されている地域の方言における普通名詞の数の体系では、現代の標準フランス語と異なる様相が見られた可能性が考えられる。この一例として、ドローム県の方言について分析を行った Bouvier (2003) で、音声的に単数形、複数形が異なる形態が見られたことが挙げられる。

本研究における目的は、フランコプロヴァンス語地域における普通名詞の体系を明らかにすることである。具体的には、『フランス言語地図』 *Atlas linguistique de la France* を使用し、このうちラテン語の第 2 曲用<sup>1</sup>の名詞を語源に持つ語の言語地図の、フランス東部を中心に広がるフランコプロヴァンス語地域に着目し、数の体系についての分析を行う<sup>2</sup>。なお、本研究で使用した言語地図上では、語形の音声を記述するためにルスロ＝ジリエロン音声記号 *Alphabet Rousselot-Gilliéron* が使用されている。ルスロ＝ジリエロン音声記号は、今日言語学で広く使用されている国際音声記号 *International Phonetic Alphabet* (以下 IPA) とは異なる音声記号である。本研究では言語地図上のルスロ＝ジリエロン音声記号で表記された語形を、全て対応すると考えられる IPA に変換し、分析に使用している。したがって、本稿では以下全ての音声の表記を IPA に統一する。ルスロ＝ジリエロン音声記号から IPA に変換する際は、トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学 *Université Toulouse Jean Jaurès* の研究プロジェクト *Le projet SYMILA* の web ページで公開されているルスロ＝ジリエロン音声記号と IPA の対応表<sup>3</sup>を参照した。また、分析対象の資料で扱われているのは、方言の音声であり、書記ではない。したがって、本研究は方言の書記ではなく、音声における数の体系についての分析を行う。

以下では 1. 背景説明で、現代の標準フランス語の普通名詞の数の体系についての詳細や、過去になされた方言における普通名詞の数の研究、フランコプロヴァンス語地域についての詳細などを解説し、その後 2. リサーチクエスチョンで本研究におけるリサーチクエスチョンを提示する。そして 3. 分析手法では、リサーチクエスチョンを解明するために

<sup>1</sup> ロマンス諸語に分類される言語における多くの語彙は、ラテン語の語彙を起源とする。ラテン語では、文中の名詞の文法機能は、格を表示する曲用によって示されていた。そのため、例に漏れず普通名詞にも曲用が存在し、通常は語尾の形態を変化させることで曲用を表示していた。普通名詞の曲用の種類には、5 つの種類が存在し、それぞれ第 1 曲用 (sg. gen. -AE)、第 2 曲用 (sg. gen. -I)、第 3 曲用 (sg. gen. -IS)、第 4 曲用 (sg. gen. -US)、第 5 曲用 (sg. gen. -EI) と称されることが多い。

<sup>2</sup> 分析対象の地域としてフランコプロヴァンス語地域を扱っている理由については、1.3. フランコプロヴァンス語とはで解説する。また、分析対象の語としてラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞を扱っている理由については、1.4. フランコプロヴァンス語地域におけるラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別と 3.2. 分析対象の地図と語で解説する。

<sup>3</sup> [http://symila.univ-tlse2.fr/alf/notation\\_phonetique](http://symila.univ-tlse2.fr/alf/notation_phonetique)

必要な分析の手法の詳細について述べ、4. 分析結果では、3. 分析手法で解説した分析手法に則って行った分析の結果を提示する。その後、5. 議論では、4. 分析結果を踏まえ、更なる詳細な分析が必要だと判断した箇所についての議論を展開し、最後に 6. 結論でリサーチクエスチョンに対する答えを提示し、本研究の総括を行う。

## 1. 背景説明

ここでは、本研究に関連する背景について説明する。以下では、現代の標準フランス語における普通名詞の数の体系、過去になされた方言における普通名詞の数に関する研究、フランコプロヴァンス語、そしてフランコプロヴァンス語地域におけるラテン語の第 1 曲用の名詞を語源とする普通名詞の単数、複数の区別について、順番に解説を行う。

### 1.1. 現代の標準フランス語における普通名詞の数の体系

現代の標準フランス語における普通名詞の数の体系については、単数形と複数形は書記上は異なるものの、音声的に同形である場合が大多数である<sup>4</sup>。このことは、Martinet (1960 : 161) によれば、現代の標準フランス語における書き言葉の体系と話し言葉の体系の乖離の事実の一端を成している。具体的には、Martinet (1960 : 161) によれば、書き言葉において単数、複数の書記上の区別を行う際には、普通名詞の語末に *-s* を付加することで複数形を表し、話し言葉で単数、複数の区別を行う際には、普通名詞に付加される限定詞の形態を変化させて区別を行っている。例えば、「りんご」を意味する女性名詞 *pomme* は、書き言葉では単数形は *pomme*、複数形は *pommes* と綴られるが、話し言葉におけるこれらの単数形、複数形そのものの発音は、双方共に [pɔ̃m] である。そこで、話し言葉では、例えば定冠詞を付加し、単数形 *la pomme* [la pɔ̃m]、複数形 *les pommes* [le pɔ̃m] のように限定詞である定冠詞の形態を変化させることで単数、複数を区別している。これらの事実を表にまとめると、以下の通りである。

表 1. 現代の標準フランス語における大多数の普通名詞の単数、複数の区別

	書き言葉	話し言葉
単数、複数の区別の方法	普通名詞の単数形に複数を表す形態素 <i>-s</i> を付加する	普通名詞に付加される限定詞の形態を変化させる
具体例	sg. <sup>5</sup> <i>pomme</i> pl. <i>pommes</i> <sup>6</sup>	sg. <i>la pomme</i> [la pɔ̃m] pl. <i>les pommes</i> [le pɔ̃m]

<sup>4</sup> 例外も存在する。「ウシ」を意味する男性名詞 *bœuf* は、書記上は単数形 *bœuf*、複数形 *bœufs* のように単数と複数で異なっているが、音声上も単数形 [bœuf]、複数形 [bœ] のように異なる。

<sup>5</sup> 本稿では、以下単数形を *singulier* (フランス語で「単数」の意) の略称の *sg.* と表記し、複数形を *pluriel* (フランス語で「複数」の意) の略称の *pl.* と表記することがある。

<sup>6</sup> 太字は単数、複数の区別を担っている箇所を表す。

## 1.2. 過去になされた方言における普通名詞の数に関連する研究

ここで、これまでになされた方言における普通名詞の数に関連する研究を 2 つ紹介する。該当する研究は、Bouvier (2003)と Tuailon (1971)である。

Bouvier (2003)は、『プロヴァンス言語民俗誌地図』 *Atlas linguistique et ethnographique de la Provence* を用いて 20 世紀半ばのドローーム県<sup>7</sup>の方言の音韻変化を分析した研究だが、同方言における普通名詞や形容詞の単数、複数の区別も副次的に扱っている。この研究では、語末の母音の音色の違いによって単数、複数とを区別する例が確認されている。例えば、ドローーム県内のある地点では、現代の標準フランス語において「小さい」を意味する形容詞 *petit* に該当する語の単数形、複数形として、それぞれ [pøtø]、[pøti] という語形が見られた。すなわち、ここでは単数が [-ø]、複数形が [-i] という語末の母音の音色の対立によって、単数、複数の対立を表していると考えられる。したがって、この研究から、さまざまな方言では、現代の標準フランス語と異なる単数、複数の区別が見られる可能性があると考えられる。

次に、Tuailon (1971)は、現代の標準フランス語において「馬」を表す男性名詞 *cheval* に該当する語の、19 世紀から 20 世紀初頭にかけての各地の方言における単数、複数の区別の分析を扱っている研究である。この研究の分析対象としては、『フランス言語地図』 *Atlas linguistique de la France* に収録されている *cheval* の言語地図が用いられており、分析の際は言語地図上に表記されている全ての地点を扱っている。この研究からは、*cheval* の単数、複数の区別について、北フランスを中心とするオイル語地域と、南フランスを中心とするオック語地域で傾向が異なっていたことがわかった。まず、オイル語地域の各地点は、元々は語源のラテン語<sup>8</sup>から音声変化を経てもなお単数形と複数形は音声的に異なっていたが、複数形による類推が起り、単数形と複数形が音声的に同形態になる傾向があった。これに対し、オック語地域の各地点は、複数形による類推は起らず、語源のラテン語から音声変化を経た形態がそのまま保存される傾向にあった。したがって、オック語地域の多くの地点では、単数形と複数形が音声的に異なる形態が確認された。なお、*cheval* はラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞だが、『フランス言語地図』 *Atlas linguistique de la France* を用いた各地の方言における *cheval* に該当する語の単数、複数の区別についての分析が、この Tuailon (1971)で既になされているため、本研究では *cheval* の分析は行わないこととする。

<sup>7</sup> ドローーム県は、フランスの南東部に位置するオーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ地域圏内の県である。ちょうどリヨンとマルセイユの中間あたりに位置している。

<sup>8</sup> 一部を除いて、*cheval* の言語地図上で見られる語形の語源は、ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク Walter von Wartburg による『フランス語語源辞典』 *Französisches Etymologisches Wörterbuch* (以下 *FEW*)によれば、ラテン語で「馬」を意味する第 2 曲用の男性名詞 *CABALLUS* の対格形である。すなわち、単数形、複数形として表記されているの語源は、それぞれ対格単数形 *CABALLUM*、対格複数形 *CABALLOS* である。したがって、語源に値するラテン語の段階では、単数形と複数形は音声的に異なっていた。

### 1.3. フランコプロヴァンス語とは

次に、フランコプロヴァンス語についての解説を行う。以下では、フランコプロヴァンス語の地理的特徴を述べた後、フランコプロヴァンス語の言語的特徴について言及する。

フランコプロヴァンス語地域は、フランス、イタリア、スイスの3つの国家にまたがって存在する。地図上に示すと、以下の範囲がフランコプロヴァンス語地域に該当する。

図 1. Bert et al. (2009 : 13)におけるフランコプロヴァンス語地域の地図



図 2. Diemoz (2008 : 4)におけるフランコプロヴァンス語地域を拡大した地図

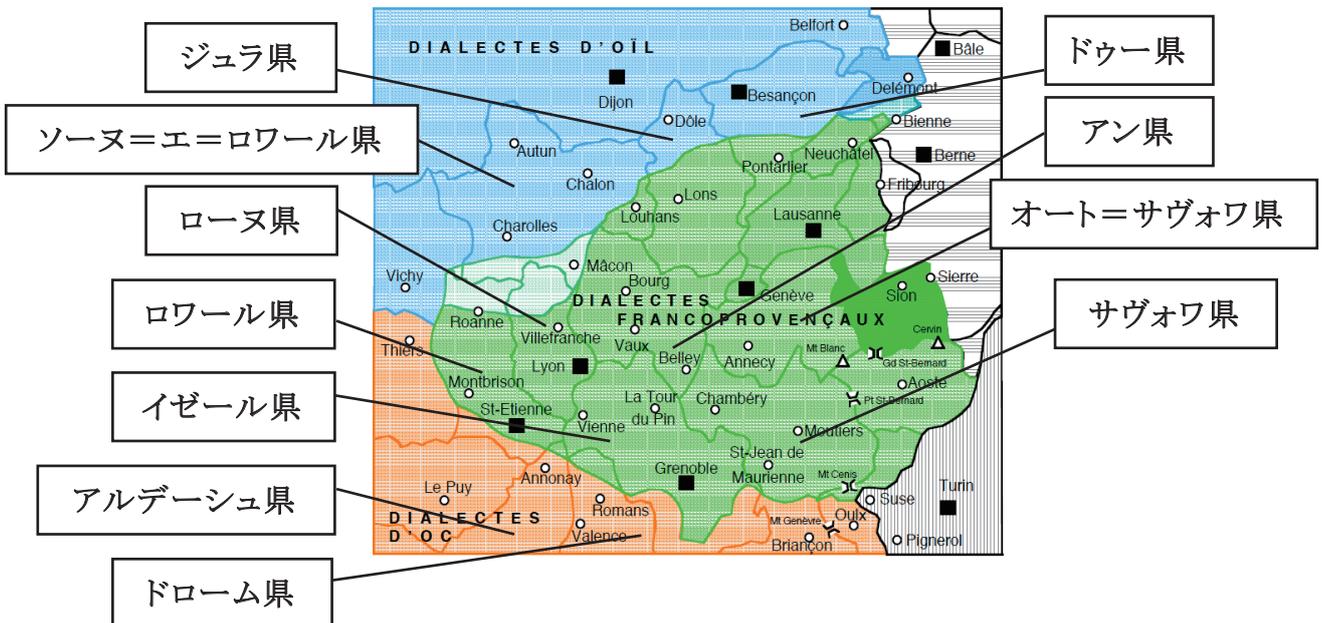


図 1 からわかるように、この地域は、北はオイル語地域と、南はオック語地域と接している。フランス国内でこの地域に含まれる箇所として、Bert et al. (2009 : 16) によれば、まず、オート＝サヴォワ県、サヴォワ県、アン県、ローヌ県の全体、ロワール県、イゼール県の大部分、そしてドローム県、アルデーシュ県の北端といった、旧ローヌ＝アルプ地域圏<sup>9</sup>の大部分が挙げられる。また、Bert et al. (2009 : 16) によれば、旧ローヌ＝アルプ地域圏のみならず、旧フランシュ＝コンテ地域圏内のジュラ県の 3 分の 2、ドゥー県の南端や、旧ブルゴーニュ地域圏内のソーヌ＝エ＝ロワール県の南東端も含まれる。また、この地域はフランス国内のみならず、スイス、イタリアにも広がっており、具体的には、Bert et al. (2009 : 17) によれば、スイスのフランス語圏のうちジュラ州を除いた全ての州と、イタリアのアオスタ谷、グラン・パラディーゾ山の南部に位置する谷、チェニスキア溪谷の 4 つの共同体がフランコプロヴァンス語地域に含まれている。

この他にフランコプロヴァンス語地域には飛び地が存在する。Bert et al. (2009 : 17) によれば、イタリア南部プツリャ州フォッジャ県の 2 つ共同体、ファエートとチェッレ・ディ・サン・ヴィートがこの飛び地に該当する。この飛び地が存在する理由は、Bert et al. (2009 : 17) によれば 13 世紀、14 世紀に現在のフランスのアン県、イゼール県の人々がこの飛び地に移住したためだと考えられている。なお、本研究の分析では、この飛び地は扱わないこととする。

フランコプロヴァンス語に顕著な言語的特徴としては、Tuailon (2007 : 15-16) によれば、5 種類の語末の無強勢母音 [a], [i], [e], [o], [ɔ] を持つことが挙げられる。フランコプロヴァンス語においてこれらの無強勢母音が見られる具体例として、次のものが挙げられる。

表 2. 現代の標準フランス語と  
それに対応するフランコプロヴァンス語の一例<sup>10</sup>

現代の標準フランス語	フランコプロヴァンス語の一例
femme f. 「妻、女性」	[fɛna <sup>11</sup> ]
fille f. 「娘、女の子」	[fiʎi]
père m. 「父」	[pare]
coude m. 「ひじ」	[kɔdo]

これに対し、フランコプロヴァンス語地域の北に隣接するオイル語地域では、Tuailon (2007 : 17) によれば、9 世紀から 16 世紀、すなわちカロリング朝時代からルネサンス期にかけて、語末の無強勢母音は全て [ə] となった後、無音化している。したがってフランコプロヴァンス語での 5 種類の語末の無強勢母音の保持は、オイル語との大きな違いだと言える。

また、Tuailon (2007 : 38) によれば、フランコプロヴァンス語におけるこれらの語末の

<sup>9</sup> ここで述べている旧ローヌ＝アルプ地域圏、旧フランシュ＝コンテ地域圏、旧ブルゴーニュ地域圏は、2015 年までの地域区分に基づいた地域圏のことである。

<sup>10</sup> TUAILLON, G. (2007). *Francoprovençal* : 15-16

<sup>11</sup> 太字は語末の無強勢母音を表している。

無強勢母音は、性、数、動詞の人称を区別する文法的機能を担うことがあった。すなわち、フランコプロヴァンス語では、語末の無強勢母音の音色の違いによって、性、数、動詞の人称を区別する例が見られたということである。例えば、Tuailon (2007 : 15-16) によれば、現代の標準フランス語の女性名詞 *femme* 「妻、女性」に該当する語の単数、複数の区別の一例として、単数形 [fena]、複数形 [fene] という対立が挙げられる。すなわち、単数が [-a]、複数形が [-e] という語末の無強勢母音の音色の対立によって、単数、複数の対立を表していると考えられる。したがって、さまざまな普通名詞について、語末の無強勢母音の音色の対立によって単数、複数の区別を行う例が、フランコプロヴァンス語地域で見られる可能性があると考えられる。以上のことが理由で、本研究ではフランコプロヴァンス語地域を分析対象の地域とし、普通名詞の数の体系について分析している。

#### 1.4 フランコプロヴァンス語地域における

##### ラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別

ところで、本研究で分析対象としている語は、ラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞だが、ラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別については、大河原 (2020)<sup>12</sup> で既に分析されている。大河原 (2020) でラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞として分析対象となっている語は、フランコプロヴァンス語地域の方言において、現代の標準フランス語で「耳」を意味する女性名詞 *oreille* と、「雌牛」を意味する女性名詞 *vache* それぞれに該当する語<sup>13</sup>であり、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての方言データを収録した『フランス言語地図』*Atlas linguistique de la France* のうち、*oreille* の言語地図と *vache* の言語地図を用いて分析を行っている。この研究結果からは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのフランコプロヴァンス語地域内では、場所によって単数、複数の区別の方法が異なっていたことがわかった。この研究において分析結果として提示されている地図は以下の通りである。

---

<sup>12</sup> 2020 年 5 月 16 日・17 日にインターネット上で開催された日本ロマンス語学会第 58 回大会における口頭発表(東京外国語大学大学院 大河原香穂「フランコプロヴァンス語地域における単数形、複数形」)である。

<sup>13</sup> ここで扱っている、フランコプロヴァンス語地域の方言で *oreille* に該当する語の語源は、*FEW* によれば、ラテン語で「耳」を意味する第 1 曲用の女性名詞 *AURICULA* の対格形である。すなわち、単数形、複数形は、それぞれ対格単数形 *AURICULA*、対格複数形 *AURICULAS* である。また、フランコプロヴァンス語地域の方言で *vache* に該当する語の語源は、*FEW* によれば、ラテン語で「雌牛」を意味する第 1 曲用の女性名詞 *VACCA* の対格形である。すなわち、単数形、複数形は、それぞれ対格単数形 *VACCA*、対格複数形 *VACCAS* である。

図 3. 19 世紀末から 20 世紀初頭のフランコプロヴァンス語地域と周辺部においてラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別について分析した地図<sup>14, 15, 16</sup>

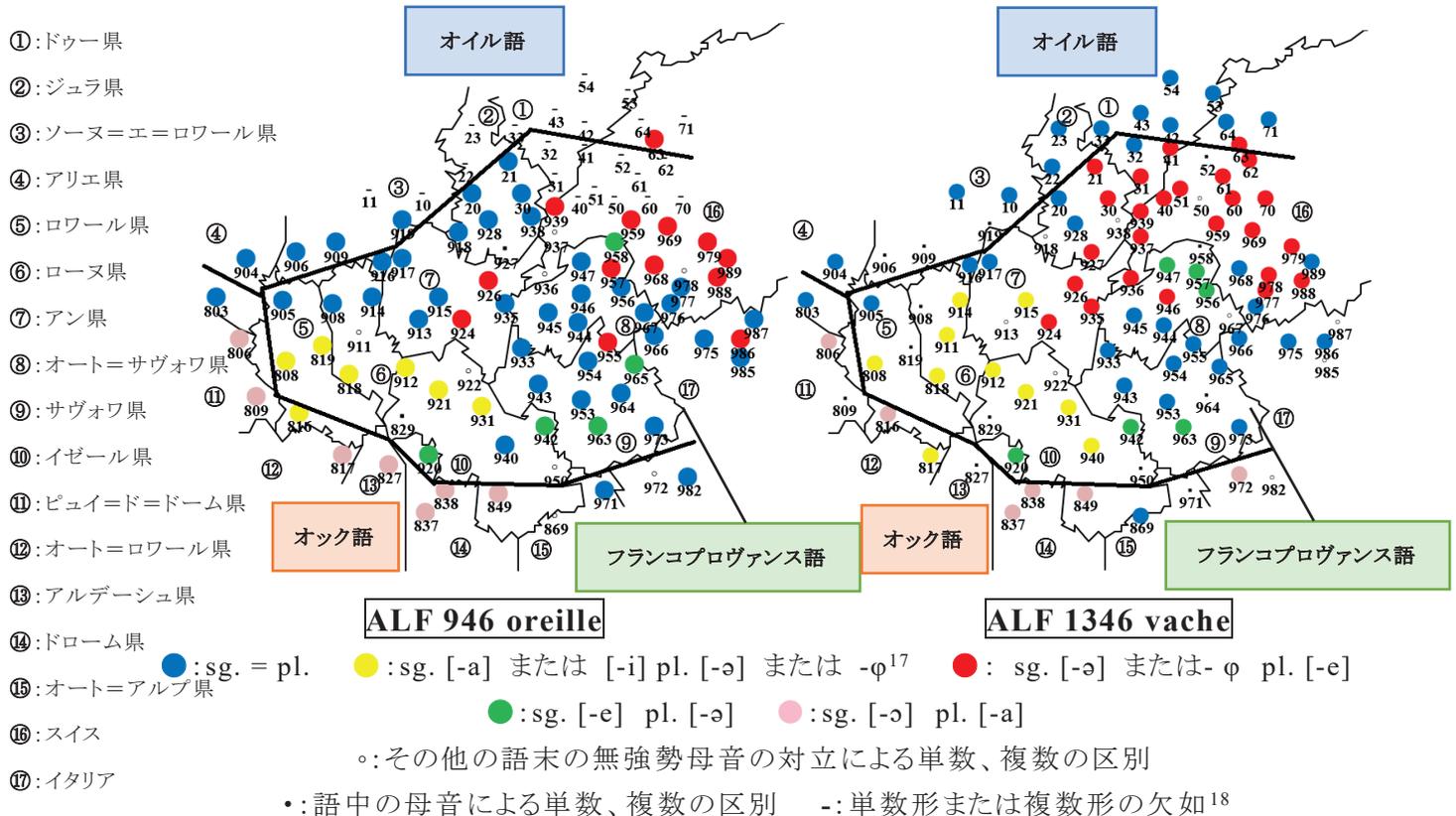


図 3 中の太線は、フランコプロヴァンス語地域、オイル語地域、オック語地域といった各言語区分の境界線を示している。この図からも見て取れるように、フランコプロヴァンス語地域内では 2 つの語に共通してみられる 3 つの大きな傾向があると考えられる。1 つ目は、北西部から北部にかけての地域と、南東部では、青●で表示されている地点、すなわち単数形と複数形が音声的に同形態である地点が多く見られるということである。次に、南西部では、黄色●で表示されている地点、すなわち単数形が [-a] または [-i]、複数形が [-ə] または -φ という対立で単数、複数の区別を行っている地点が多く見られるということである。3 つ目は、北東部では、赤●で表示されている地点、すなわち単数形が [-ə] または -φ、複数形が [-e] という対立で単数、複数の区別を行っている地点が多く見られると

<sup>14</sup> 大河原 (2020)で使用されている地図を改訂したものである。

<sup>15</sup> 各地点を分類する際、音声的な類似から、[-e], [-ɛ] は[-e]、[-a], [-a] は [-a]、[-o]は [-o] として扱っている。

<sup>16</sup> 地図における各言語区分の境界線は、Le projet SYMILA の web ページで公開している各地点の言語区分を参考にした。

<http://symila.univ-tlse2.fr/alf/lieux/>

<sup>17</sup> ここでの -φ とは、語末の無強勢母音が完全に脱落した状態を表す。

<sup>18</sup> 「単数形または複数形の欠如」に分類されている地点は、本来であれば単数形として使用されている語形と複数形として使用されている語形が確認されるはずにも関わらず、片方の語形しか確認できなかった地点である。

ということである。

このように、フランコプロヴァンス語地域におけるラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別についての分析はなされているが、この研究以外にフランコプロヴァンス語地域全体に着目してさまざまな普通名詞の数の体系について分析を行った研究は存在しない。したがって、ラテン語の第 1 曲用の名詞以外の語を語源に持つ普通名詞でも同様の結果が見られるのかどうかという疑問を抱くのは当然のことであろう。このことから、本研究ではラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞を分析対象としている。

## 2. リサーチクエスチョン

以上の内容を踏まえ、ここで本研究におけるリサーチクエスチョンを提示する。本研究におけるリサーチクエスチョンは以下の通りである。

- 19 世紀末から 20 世紀初頭<sup>19</sup>のフランコプロヴァンス語地域では、ラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別の様相は、ラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別の様相と同様であったのか？

1. 4 フランコプロヴァンス語におけるラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別でも触れたように、大河原 (2020) を除き、フランコプロヴァンス語地域全体に注目して、さまざまな普通名詞の数の体系について分析を行った研究はこれまでのところ見られない。また、大河原 (2020) では、ラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞を扱っているが、第 2 曲用の名詞起源の普通名詞は扱われていない。以上のことから、本研究には新奇性があると判断できる。

## 3. 分析手法

ここで、本研究におけるリサーチクエスチョンに対する答えを出すために行う分析について述べる。以下では、分析対象の資料、分析対象の地図と語、分析対象の地点、そして分析の手順の順番に解説を行う。

### 3.1. 分析対象の資料

本研究で分析対象とするのは、Tuailon (1971) や大河原 (2020)でも使用されていた『フランス言語地図』*Atlas linguistique de la France* (以下 ALF)である。ALF の著者は、ジュール・ジリエロン Jules Gilliéron と、その弟子のエドモン・エドモン Edmond

---

<sup>19</sup> ここで期間を 19 世紀末から 20 世紀初頭に限定している理由は、3.1. 分析対象の資料で解説する。

Edmont である。ALF で扱っている地理的な範囲は、コルシカ島や非ロマンス語圏を除いたヨーロッパのフランス全土、スイス、イタリア、ベルギーのガロ＝ロマンス語地域、そしてイギリス王室領であるチャンネル諸島である。したがって、フランス国内であっても、ケルト語圏であるブルターニュ半島周辺や、ゲルマン語圏であるグラン・テスト地域圏の一部などは扱っていない。これらの対象地域内の 638 地点における方言が ALF に収録されている。ALF を作成するにあたっては、Gilliéron (1902 : 4, 24-28) によれば、1897 年から 1901 年の間にエドモンによって各地点の話者に対して直接聞き取り調査が行われている。したがって、ALF に収録されている方言は、19 世紀末から 20 世紀初頭の方言である。本研究のリサーチクエスションでは、「19 世紀末から 20 世紀初頭」という期間の限定を設けていたが、その理由は ALF の調査期間に基づいているためである。調査の形式については、Gilliéron (1902 : 4-6) によれば、翻訳形式の調査が行われた。すなわち、標準フランス語における語形を提示し、それらの語が各地点の方言ではどのように発音されるのかを尋ねたのである。Gilliéron (1902 : 7, 29-55) によれば、これらの調査は、多くの場合、各地点で 1 人の話者に対して行われており、質問に対して 1 番最初に答えた語形が ALF 上に記載されている。また、ALF に収録されている地図の枚数は全部で 1920 枚である。これらの各地図ごとに異なる語や表現が扱われている。また、各地図上には対象地域の地図が描写されており、各地点を示す地点番号と共に、それぞれの地点で話者から採取した語形がルスロ＝ジリエロン音声記号によって表記されている。なお、近年グルノーブル・アルプ大学 Université Grenoble Alpes の Gipsa-lab などの機関によって ALF の電子化が行われたことにより、ALF に収録されている各地図は web サイト<sup>20</sup>上でも閲覧可能である。本研究では、この電子化版を分析に用いている。

### 3.2. 分析対象の地図と語

ALF に収録されている地図の中で、本研究で分析対象として選択した地図は以下の 4 枚の地図である。

- ALF639 genou, genoux
- ALF932 œil (l')<sup>21</sup>, yeux (les)
- ALF1067 pou ; poux
- ALF1132 râteau, rateaux

したがって、分析対象の語は、以下の 4 つの現代の標準フランス語の名詞に対応するフランコプロヴァンス語地域の各地点の語である。

<sup>20</sup> <http://lig-tdcge.imag.fr/cartodialect5/#/>

<sup>21</sup> 括弧内は、語形が採取された文脈を表す。

表 3. 分析対象の語に対応する現代の標準フランス語と分析対象の語の語源

現代の標準フランス語	語源のラテン語 <sup>22</sup> の主格単数形	ALF における地図
genou m. 「膝」	GENUCULUM n. 2. <sup>23</sup> 「膝」	ALF639 genou, genoux
œil m. 「目」	OCULUS m. 2. 「目」	ALF932 œil (l'), yeux (les)
pou m. 「シラミ」	PEDUCULUS m. 2. 「小さな足」	ALF1067 pou ; poux
râteau m. 「熊手」	RASTELLUS m. 2. 「熊手」	ALF1132 râteau, rateaux

分析対象の地図と語は、以下の 4 つの条件から絞り込んだ。

条件 I: 1 枚の地図で単数形、複数形双方の語形を確認することができる

条件 II: 分析対象の地点における全ての語形が同一の語を語源に持つ

条件 III: ラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ

条件 IV: cheval を除外する

条件 I を設けた理由は、一見すると、2 枚の地図を照らし合わせることで、単数、複数の区別について分析できると思われる語でも、対照が難しい場合があるためである。例えば、ALF686 herbe という地図と ALF827 les mauvaises herbes (arracher -) という地図が存在するため、一見すると現代の標準フランス語の女性名詞 herbe 「草」に対応する語についての単数、複数の区別を分析できるように思われるかもしれない。しかし、ALF827 les mauvaises herbes (arracher -) の地図上の地点 969 では、[mʊnɛ] という語形が見られる。この語形は、herbes 「草 pl.」に対応する語形ではなく、mauvaises herbes 「雑草 pl.」という連辞に対応する語形である。したがって、この語形は、現代の標準フランス語の形容詞 mauvais 「悪い」の女性複数形 mauvaises に該当する語と、herbe の複数形である herbes に該当する語に切り離すことが出来ない。よって、この語形を herbe の複数形に対応する語として、単数形と共に対照させることは不可能である。条件 II を設けた理由は、仮に分析対象の地点のうち、いくつかの地点で他と異なる語源を持つ語形が見られた場合、全ての分析対象の間での対照が難しくなってしまうためである。条件 III を設けた理由は、語源のラテン語の曲用を限定することで、それぞれの地図の間での対照を容易にするためであり、また、既に大河原 (2020) でラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ語が扱われているためである。条件 IV を設けた理由は、条件 I から条件 III を満たしているものの cheval に対応する語の単数、複数の区別については既に Tuallion (1971) で分析されているためである。

<sup>22</sup> 各語の語源については、FEW を参照した。

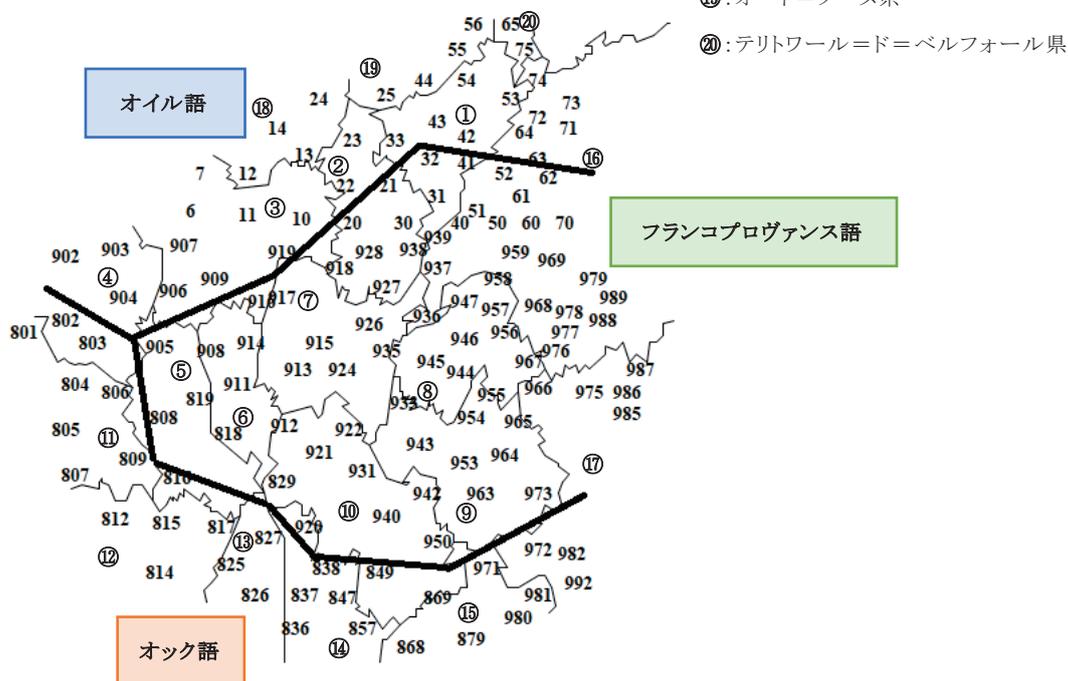
<sup>23</sup> ここでの 2. とは、ラテン語の第 2 曲用名詞であることを表す。

### 3.3. 分析対象の地点

本研究では、ALF で扱っている地点のうち、分析対象地域であるフランコプロヴァンス語地域に該当する地点を分析対象の地点に含めている。この他に、フランコプロヴァンス語地域には該当せずとも、オイル語地域、オック語地域のうちフランコプロヴァンス語地域に隣接するいくつかの地点も分析対象の地域に含めた。これらのフランコプロヴァンス語地域外の地点も分析対象の地域に含めた理由は、比較対象としてフランコプロヴァンス語地域外の地点についても分析を行うことで、フランコプロヴァンス語地域の特徴が探りやすくなるためである。したがって本研究における分析対象の地点は、以下の 140 地点である。

- ①:ドゥー県
- ②:ジュラ県
- ③:ソーヌ＝エ＝ロワール県
- ④:アリエ県
- ⑤:ロワール県
- ⑥:ロース県
- ⑦:アン県
- ⑧:オート＝サヴォワ県
- ⑨:サヴォワ県
- ⑩:イゼール県
- ⑪:ピュイ＝ド＝ドーム県
- ⑫:オート＝ロワール県
- ⑬:アルデーシュ県
- ⑭:ドローム県
- ⑮:オート＝アルプ県
- ⑯:スイス
- ⑰:イタリア

図 4. 分析対象の地点<sup>24, 25</sup>



これらの 140 地点のうち、フランコプロヴァンス語地域内の地点は 75 地点、オイル語地域内の地点は 34 地点、オック語地域内の地点は 31 地点である。

### 3.4. 分析の手順

まず、各地図の分析対象の地点に単数形、複数形として表記されている語形<sup>26</sup>に基

<sup>24</sup> ここでの各言語区分の境界線も、Le projet SYMILA の web ページで公開されている各地点の言語区分を参考にした。

<sup>25</sup> ALF 上に描かれている行政区画は、ALF が作成された時期に当たる 19 世紀末から 20 世紀初頭のものであるため、本研究ではこの行政区画をそのまま使用することとする。

<sup>26</sup> 地点によっては第 2 形が確認される地点もあったが、本研究では第 1 形のみ扱うこととした。

づいて、全ての地点を以下の3つに分類した。

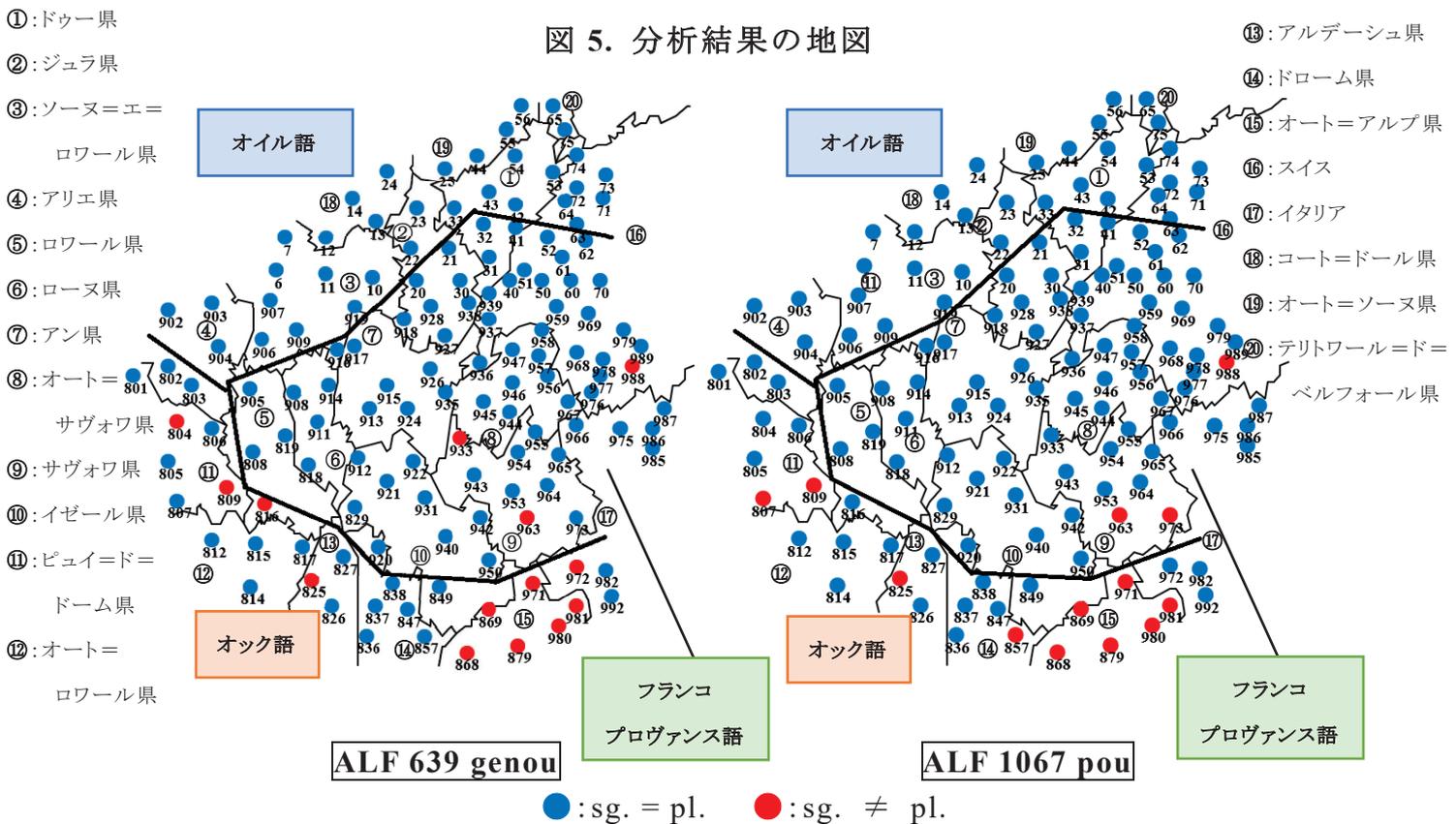
表 4. 各地点の分類方法

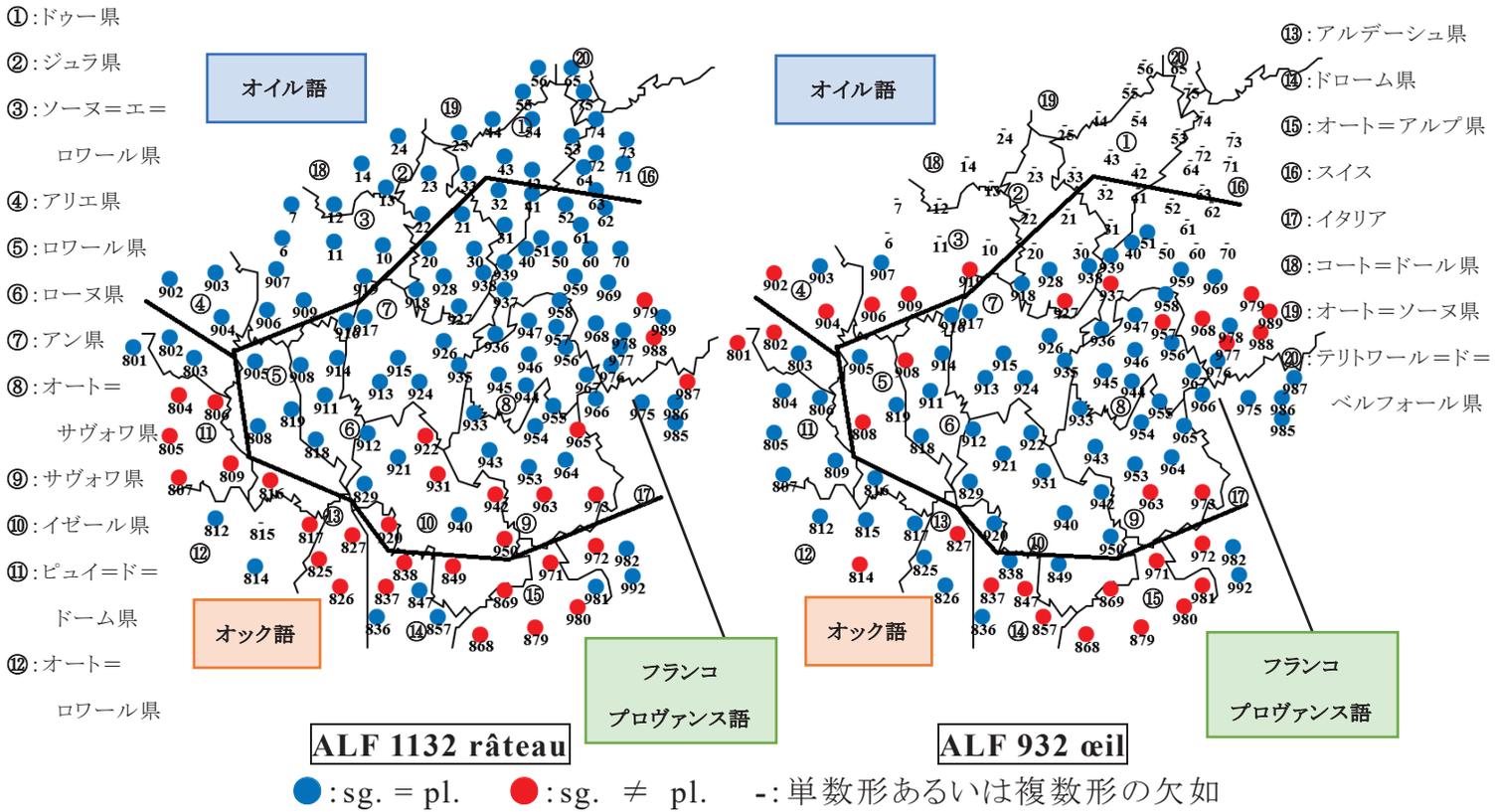
分類記号	地点の分類
●	sg. = pl.
●	sg. ≠ pl.
-	単数形または複数形の欠如

その後、分類記号を各地点に表示させ、地図上にプロットした。地図を作成し、各地点に分類記号をプロットする際に使用したツールは、Excel の散布図機能である。

#### 4. 分析結果

ここでは、4枚の地図それぞれについて、以上の手法に則った分析を行った結果を解説する。以下は、4枚の地図の分析から得られた結果である。





genou に対応する語については、分析対象の全地点のうち、単数形と複数形が音声的に同形である地点(●)は126地点、異なる地点(●)は14地点であった。このうち、フランコプロヴァンス語地域内に焦点を当てると、単数形と複数形が音声的に同形である地点は72地点<sup>27</sup>、異なる地点は3地点であった。単数形と複数形が音声的に異なっていたのは、サヴォワ県の地点933、963、スイスの地点988であり、これらの地点における語形は以下の通りである。

表 5. genou に対応する語について  
単数形と複数形が音声的に異なるフランコプロヴァンス語地域内の地点

	サヴォワ県	スイス	
地点番号	933	963	988
単数形	ʒenœ	ʒenø	zəno
複数形	ʒenÿ	ʒenoːe	zənoʃ

したがって、フランコプロヴァンス語地域では大多数の地点で単複同形であったことがわかる。なお、オイル語地域内については、34地点全てで単数形と複数形が音声的に同形となっていた。また、オック語地域内については、単数形と複数形が音声的に同形である地点は20地点、異なる地点は11地点であった。したがって、フランコプロヴァンス語地域の様相は単数形と複数形が音声的に同形の地点が多く見られるオイル語地域的であった。

<sup>27</sup> 同地域内の全地点の96%にあたる。

pou に対応する語については、分析対象の全地点のうち、単数形と複数形が音声的に同形である地点(●)は 127 地点、異なる地点(●)は 13 地点であった。このうち、フランコプロヴァンス語地域内に焦点を当てると、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 72 地点<sup>28</sup>、異なる地点は 3 地点であった。単数形と複数形が音声的に異なっていたのは、サヴォワ県の地点 963, 973、スイスの地点 988 であり、これらの地点における語形は以下の通りである。

表 6. pou に対応する語について  
単数形と複数形が音声的に異なるフランコプロヴァンス語地域内の地点

	サヴォワ県		スイス
地点番号	963	973	988
単数形	pjø	pjʉt	pjɔl
複数形	pjɔ	pju	pjɔs

したがって、pou に対応する語についても、フランコプロヴァンス語地域では大多数の地点で単複同形であったことがわかる。なお、オイル語地域内については、34 地点全てで単数形と複数形が音声的に同形となっていた。また、オック語地域内については、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 21 地点、異なる地点は 10 地点であった。したがって、ここでもフランコプロヴァンス語地域の様相は単数形と複数形が音声的に同形の地点が多く見られるオイル語地域的であった。

râteau に対応する語については、分析対象の全地点のうち、単数形と複数形が音声的に同形である地点(●)は 109 地点、異なる地点(●)は 30 地点、単数形あるいは複数形が欠如している地点(-)は 1 地点であった。このうち、フランコプロヴァンス語地域内に焦点を当てると、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 64 地点<sup>29</sup>、異なる地点は 11 地点であった。単数形と複数形が音声的に異なっていたのは、サヴォワ県の地点 963, 965, 973、イゼール県の地点 922, 931, 942, 950、ドローム県の地点 920、スイスの地点 979, 988、イタリアの地点 987 であり、これらの地点における語形は以下の通りである。

表 7. râteau に対応する語について  
単数形と複数形が音声的に異なるフランコプロヴァンス語地域内の地点

	サヴォワ県			イゼール県				ドローム県
地点番号	963	965	973	922	931	942	950	920
単数形	rae	raθɛl	ra:el	rate	rate	rate	rate	ra:te
複数形	rajo	ra:θɛ	raεɔ'	ratjo	rato	ratø	rateɔ	ra:te

<sup>28</sup> 同地域内の全地点の 96%にあたる。

<sup>29</sup> 同地域内の全地点の約 85%にあたる。

	スイス		イタリア
地点番号	979	988	987
単数形	raːxe	raːfe	raxel
複数形	raːxes	raːfes	ratej

したがって、ここでもフランコプロヴァンス語地域では大多数の地点で単複同形であったことがわかる。なお、オイル語地域内については、34 地点全てで単数形と複数形が音声的に同形となっていた。また、オック語地域内については、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 11 地点、異なる地点は 19 地点、単数形あるいは複数形が欠如している地点は 1 地点であった。したがって、またしてもフランコプロヴァンス語地域の様相は単数形と複数形が音声的に同形の地点が多く見られるオイル語地域的であった。

œil に対応する語については、分析対象の全地点のうち、単数形と複数形が音声的に同形である地点(●)は 70 地点、異なる地点(●)は 31 地点、単数形あるいは複数形が欠如している地点(-)は 39 地点であった。このうち、フランコプロヴァンス語地域内に焦点を当てると、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 51 地点<sup>30</sup>、異なる地点は 12 地点、単数形あるいは複数形が欠如している地点は 12 地点であった。単数形と複数形が音声的に異なっていたのは、サヴォワ県の地点 963, 973、オート＝アルプ県の地点 957、ジュラ県の地点 927、ローヌ県の地点 908、ロワール県の地点 808、スイスの地点 937, 968, 977, 979, 988, 989 であり、これらの地点における語形は以下の通りである。

表 8. œil に対応する語について  
単数形と複数形が音声的に異なるフランコプロヴァンス語地域内の地点

	サヴォワ県		オート＝アルプ県	ジュラ県	ローヌ県	ロワール県
地点番号	963	973	957	927	908	808
単数形	jɥe	øɫ	jwɛ	jœ	ø	œ
複数形	y	y	wɛ	œ	u	ø

	スイス					
地点番号	937	968	977	979	988	989
単数形	ɥe	yɛ	zɥɛ	ɛɫ	wɛɫ	ɛs
複数形	ɥːe	ɥɛ	ɥɛ	wɛs	wɛs	wɛs

したがって、前述の 3 つの地図と比較して数は劣るものの、ここでもフランコプロヴァンス語地域では大多数の地点で単複同形であったことがわかる。なお、オイル語地域内については、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 5 地点、異なる地点は 2 地点、単数形あるいは複数形が欠如している地点は 27 地点であった。また、オック語地域内については、単数形と複数形が音声的に同形である地点は 17 地点、異なる地点は 14 地点

<sup>30</sup> 同地域内の全地点の約 71%にあたる。

であった。したがって、分析対象の全ての地点については単数形あるいは複数形が欠如している地点が多く見られるという点で、他の3つの地図と様相が異なっていた。

以上で提示した分析結果に基づいて、それぞれの地図における各地域で、どの分類の地図が何地点見られたのかについて表にまとめたところ、以下のようになった。

表 9. 分析結果のまとめ

	genou に対応する語				pou に対応する語			
	fp. <sup>31</sup>	oïl	oc	合計	fp.	oïl	oc	合計
●	72	34	20	126	72	34	21	127
●	3	0	11	14	3	0	10	13

●:sg. = pl.    ●:sg. ≠ pl.<sup>32</sup>

	râteau に対応する語				œil に対応する語			
	fp.	oïl	oc	合計	fp.	oïl	oc	合計
●	64	34	11	109	51	2	17	70
●	11	0	19	30	12	5	14	31
-	0	0	1	1	12	27	0	39

●:sg. = pl.    ●:sg. ≠ pl.    -: 単数形あるいは複数形の欠如

以上のことから、いずれの地図においても、フランコプロヴァンス語地域では単数形と複数形が音声的に同形である地点が70%以上を占めていることがわかる。したがって、ラテン語の第1曲用の名詞起源の普通名詞とは異なり、第2曲用の名詞起源の普通名詞については、大多数の地点で単数形と複数形が音声的に同形であったと言える。

## 5. 議論

以上で提示した分析結果からは、フランコプロヴァンス地域全体の大きな傾向のみならず、フランコプロヴァンス地域内外で局所的に見られる興味深い分布や現象も確認されたため、これらの事柄について更なる詳細な議論へ踏み込むこととする。ここでは大きく分けて、4枚の地図でフランコプロヴァンス地域内で単数形、複数形が音声的に異なる地点、フランコプロヴァンス語地域内 œil に対応する語の地図についての詳細な議論を順番に扱う。

### 5.1. 4枚の地図でフランコプロヴァンス地域内で単数形、複数形が音声的に異なる地点

単数形と複数形が音声的に同形である地点に比べて絶対数は少ないものの、フラン

<sup>31</sup> ここでの fp., oïl, oc とは、それぞれフランコプロヴァンス語地域、オイル語地域、オック語地域のことを表す。

<sup>32</sup> genou に対応する語と pou に対応する語については、単数形あるいは複数形が欠如している地点はいかなる地域においても確認されなかった。

コプロヴァンス地域でも単数形、複数形が音声的に異なる地点は 4 枚の地図全てで確認された。したがって、「フランコプロヴァンス地域の地点のうち 4 枚全ての地図で単数形、複数形が音声的に異なっている地点は存在するのか？存在する場合、4 枚全てで全く同じ方法で単数、複数の区別を行っているのか？」という疑問を抱くだろう。4 枚の全ての地図で単数形、複数形が音声的に異なっている地点として、地点 988 (フランス語圏スイスのエヴォレーヌ)、地点 963 (サヴォワ県のサン＝マルタン＝ド＝ラ＝ポルト) が挙げられる。それぞれの地図のこの 2 つの地点で確認される単数形、複数形は以下の通りである。

表 10. エヴォレーヌとサン＝マルタン＝ド＝ラ＝ポルトにおける語形

	エヴォレーヌ(地点 988)				サン＝マルタン＝ド＝ラ＝ポルト (地点 963)			
地図	genou	pou	râteau	œil	genou	pou	râteau	œil
単数形	zəno	pjɔl	ra:ʔe	wɛl	ʒenø	pjø	rae	jʔe
複数形	zənəs	pjɔs	ra:ʔes	wɛs	ʒeno:e	pjɔ	rajo	y

エヴォレーヌの語形に着目すると、語によって単数形、複数形の違いに音声の揺れは存在するものの、4 つ地図全てで単数形  $-\varphi^{33}$ 、複数形  $[-s]$  という対立で数の対立を表していると考えられる。Kristol (2013 : 344) によれば、スイスのヴァレー州のフランコプロヴァンス地域では、基本的に男性名詞は単数形と複数形は音声的に同形だが、 $[-s]$  あるいは  $[-ʃ]$  による数の対立がエヴォレーヌのみで保存されている。したがって、本研究の分析においてエヴォレーヌで見られた対立は、Kristol (2013) で言及されている対立に該当すると思われる。一方、サン＝マルタン＝ド＝ラ＝ポルトにおける語形についてはエヴォレーヌのように 4 枚の地図で一貫した単数、複数の区別の方法が見られる訳ではなかった。

## 5.2. œil に対応する語の地図で見られる興味深い分布と現象

œil に対応する語の地図の分析からは、同地図に特有な分布や現象が確認された。したがって、以下ではこれらの分布や現象についての議論を展開する。まず、フランコプロヴァンス語地域の地点の 70% 以上で単数形と複数形が音声的に同形であることは本研究の分析対象の全ての地図に共通しているものの、フランコプロヴァンス語地域北東部からオイル語地域にかけてかなりの数の単数形あるいは複数形が欠如している地点が広がっているという点で、同地図の様相は他の 3 つの地図の様相と異なっている。このような様相は、大河原 (2020) で扱われている現代フランス語の oreille 「耳」に対応する語の地図と共通している。ここで、œil と oreille の共通点について考えると、両者は体部位を表し、多くの場合 2 つ存在することが前提である双数的な語彙であることがわかる。したがって œil に対応する語の地図で単数形あるいは複数形が欠如している地点が多く見られる理由には、意味内容が関係している可能性がある。しかし ALF には œil に対応する

<sup>33</sup> ここでの  $-\varphi$  とは、語末に複数を表す  $[-s]$  の表示がない状態を指す。

語についての地図が他にも存在するため、現段階では断定できず、更なる分析が必要であろう。

また、œil に対応する語の地図のフランコプロヴァンス語地域において単数形、複数形が音声的に同形である地点の多くでは、異分析が起こっていることがわかった。例えば地点 917 には、定冠詞が付加した単数形として [lu zy]、複数形として [le zy] が記載されている。名詞の部分だけに着目すると、語頭には共通して [z-] という子音が存在することがわかる。この手がかりから、以下のような時系列に沿った変遷が考えられる。

sg. [lu X<sup>34</sup>] pl. [le z<sup>35</sup> y] → sg. [lu X] pl. [le zy] → sg. [lu zy] pl. [le zy]  
異分析 類推

この[z-]は、元々は複数形に定冠詞が付加した際のリエゾンだったものが、異分析により名詞の複数形の一部として取り込まれたものだと考えられる。その後更に類推により、[z-]が取り込まれた複数形が、単数形としても使用されるようになったと推測される。そして、結果として単数形と複数形が音声的に同形態となり、数の区別は冠詞が担うことになったと考えられる。フランコプロヴァンス語地域には、同様の現象が起こったと考えられる地点が全部で 37 地点<sup>36</sup>存在し、これらの地点は全て単数形と複数形が音声的に同形である。なお、ALF 上の他の地域でも、œil に対応する語についての異分析が起こったと考えられる地点は見られるが、フランコプロヴァンス語地域のように、異分析が起こったと考えられる地点が大量に一か所に集中して多く見られる地域は他に存在しない。

## 6. 結論

以上のことから本研究におけるリサーチクエスションに対する答えを提示する。本研究におけるリサーチクエスションは、「19 世紀末から 20 世紀初頭のフランコプロヴァンス語地域では、ラテン語の第 2 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別の様相は、ラテン語の第 1 曲用の名詞を語源に持つ普通名詞の単数、複数の区別の様相と同様であったのか？」であった。この問いに対する答えとして、第 2 曲用の名詞起源の普通名詞の単数、複数の区別の様相は、第 1 曲用の名詞起源の普通名詞の様相とは異なっており、大多数の地点で単数形と複数形が音声的に同形であったということが言える。したがって、語源のラテン語の曲用によって数の体系が異なっていたと言える。また、本研究では、他にいくつかの興味深い事柄を確認できた。まず、フランス語圏スイスのエヴォレーヌとサヴォワ県のサン＝マルタン＝ド＝ラ＝ポルトでは、分析対象の地図 4 枚で共通して単数形と複数形が音声的に異なる地点が見られたが、このうちエヴォレーヌでは全ての地図に一貫して単数形 -φ、複数形 [-s] という対立が見られた。そして、œil に対応する語

<sup>34</sup> X は類推が起こる前に存在したと考えられる単数形固有の語形の仮想として使用している。なお、この X は、「目」を意味するラテン語の第 2 曲用の男性名詞 OCULUS の単数対格形 OCULUM を語源に持つと考えられる。したがって、語源のラテン語の語頭では母音が見られるため、X の語頭においても、母音あるいは接近音の子音が見られると考えられる。

<sup>35</sup> この段階の [z] は、冠詞と名詞のリエゾンの役割を担うものである。

<sup>36</sup> 同地域内の全地点の約 49%にあたる。

の地図の様相は、本研究で扱った他の3枚の地図の様相とは異なっていたものの、フランコプロヴァンス語地域北東部からオイル語地域にかけて単数形あるいは複数形が欠如している地点が多く見られるという点で *oreille* の地図の様相と類似していることがわかった。また、*œil* の地図では、主にフランコプロヴァンス地域内で異分析が見られることがわかった。以上の分析結果は、これまでに記述されてこなかったフランコプロヴァンス語地域全体の方言の特徴の解明に寄与し、またロマンス諸語に分類される他の言語とフランコプロヴァンス語の関係をより明確に位置づけることに貢献するだろう。

今後の課題としては以下の3つの事柄が挙げられる。1つ目は、ラテン語の第3,4曲用名詞起源の普通名詞の数の体系を明らかにすることである。*ALF* に収録されている地図の中でも、第3,4曲用名詞起源の普通名詞の地図については未だ分析がなされていない。2つ目は、本研究で扱ったラテン語の第2曲用名詞起源の普通名詞のように、名詞そのものの形態の変化による数の対立を失った場合、フランコプロヴァンス語地域では代替として何を用いて数の対立を表示するのかを分析することである。そのため今後は冠詞などにも目を向ける必要があると考えている。3つ目は、本研究では明らかにすることができなかった双数的名詞の数の体系についての研究である。この問題の解決には双数的名詞を扱ったさらに多くの言語地図や、方言資料を分析する必要があると考えられる。

#### 参考文献

- BERT, M. et al. (2009). *ETUDE FORA : Francoprovençal et Occitan en Rhône-Alpes*, Lyon : Université Catholique de Lyon.
- BOUVIER, J. -C. (2003). Mutations phonologiques en cours dans des parlers francoprovençaux, *Espace du langage Géolinguistique, toponymie, cultures de l'oral et de l'écrit*, Aix-en-Provence : l'Université de Provence.
- BOUVIER, J. -C. et al. (1975-1986). *Atlas linguistique et ethnographique de la Provence*, Paris : CNRS.
- GILLIERON, J. et al. (1902-1910). *Atlas linguistique de la France*, Paris : Honoré Champion.
- GILLIERON, J. et al. (1902). *Atlas linguistique de la France : Notice servant à l'intelligence des cartes*, Paris : Honoré Champion.
- KRISTOL, A. (2013). Le francoprovençal, laboratoire des virtualités linguistiques de la Romania occidentale: le système bicasuel des parlers valaisans, *Actes del 26é Congrès internacional de lingüística i filologia romàniques, València, 6-11 septembre 2010, vol. 1*, Berlin, etc. : De Gruyter.
- MARTINET, A. (1960). *Éléments de linguistique générale*, Malakoff : Armand Colin.
- TUAILLON, G. (1971). Analyse d'une carte linguistique : « cheval-cheveaux » (ALF 269), *Travaux de linguistique et de littérature ; 9,1*, Paris : Klincksieck.
- TUAILLON, G. (2007). *Francoprovençal*, Aoste : Musumeci.

#### URL

- DIEMOZ, F. (2008). *L'expression du sujet indéterminé dans les langues romanes occidentales*, retrieved on 24 November 2020 from

<[http://alaval.unine.ch/uploads/alaval\\_docs/Diemoz\\_2008.pdf](http://alaval.unine.ch/uploads/alaval_docs/Diemoz_2008.pdf)>.

VON WARTBURG, W. (1922-2002). *Französisches Etymologisches Wörterbuch*, Bonn : Klopp ; Leipzig : Teubner ; Basel : Helbing und Lichtenhahn ; Bonn, etc. : Zbinden, retrieved on 24 November 2020 from <<https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/>>.

Le projet SYMILA, retrieved on 24 November 2020 from <<http://symila.univ-tlse2.fr/>>.

#### 口頭発表

大河原香穂 (2020). 「フランコプロヴァンス語地域における単数形、複数形」(口頭発表), 日本ロマンス語学会第 58 回大会, 2020 年 5 月 16-17 日開催.

